

困に位置しながら1時間半を費していた。このため東西線開通はこの地域において非常に大きな影響があった。

4つの位置条件のもとに全体を把握すると次のことがいえる。第1にデルタの低湿地という地形条件から水田が農業において主流となったことが葛西、浦安、行徳についていえる。同地域ではまた沿岸漁業の中でも、ノリ養殖や貝類採取を中心とする半農半漁経済が成立してきた。第2に運河を利用して船による運搬時代に、商業の主力であった問屋が運河沿いに立地し、同時に手工業者も水運を利用してその周辺に集中立地したのが、日本橋江東地域である。この都心地域では、自動車交通が過密状態にある今日では、輸送の困難をきたしている。しかし、浦安、行徳方面では東西線が通ったことに象徴されるように千葉の工業地域と都心を結ぶ交通は今後ますます発達するものと予想される。

交通の発達は今後人口流動量を増加し、この地域が発展段階にある京葉工業地帯と都心を直結する線上に位置していることから、東京湾岸地域として一体となった発展を促進させる役割を果たすものと考えられる。

富山市と高岡市の比較研究

若林佳子

富山県には、富山市（人口約27万人）と、高岡市（人口約16万人）の2つの旧城下町がある。特に、高岡市は、加賀前田藩の支配下にあり、従って現在のこの市の伝統産業も、当藩の商工業保護政策に基づいて発展して来たものである。そして、それが更には、アルミ加工などの近代工業を目芽えさせる基盤ともなっていた。高岡市のこの様な発展は、およそ第二次大戦前まで続くのであるが、廃藩置県当時には、その地理的位置の好都合なことなどから、富山市が県庁所在地となった。

現在、富山市は、富山県の中核管理機能の拠点都市として、そして、高岡市は、県南、西部の中心都市として、おのおの、そのユニークな特色を生かしながら発展の途を歩んでいるが、その発展途上においても、それぞれ独自に成長して来たものもある反面、両市が何らかの形で影響し合いながら今日に至ったものも少なくないと考えられる。そこで、この両都市がどの様に関連し合ってきたか、その結果、現在ほどの様な差異が見られるか、更には、両市が富山県の中でどの様な位置を占めているかなどを、人口・商業・工業・農業等の面から考察するのが、本論文の目的である。以

下、ごく簡単に述べてみると、

人口；大正9年から昭和45年の間は、両都市とも約4.3倍の増加率を示し、又男女の比率も、0才から14才までは男子が、15才以上は女子が多いことは、両市の共通の性格となっている。そして、これは又、富山県全体に共通する傾向でもある。通勤通学流入流出状況では、両市とも、当然のごとく他市町村からの流入が多く、しかも流入流出地域は、富山市が県全域にわたり、高岡市が県の西部にかたよっていることが特徴的である。

工業；戦前までの工業立地条件として挙げられた、豊富で低廉な電力と労働力が、電力から石油へのエネルギー変化などと共に、大きく変容していつている。現在、富山県の工業は、伸び悩みの時期にあると言える。又、当面の最大目標としては、富山・高岡新産都市設立に伴い建設された富山新港によるところの対岸貿易の推進、石油エネルギーの開発などが考えられる。高岡市においては、その伝統工業（銅器、漆器、捺染）と、それを基盤として発達した近代工業も見逃がせない。

商業；伝統的なものとして、富山市の家庭薬配置業（旧名、売薬業）があるが、最近の富山県の商業の発達全国平均よりも低いなど、全体に、その商業活動はあまり活発とは言えない。高岡市などの商品卸入先が、昔から現在に至るまで、主に大阪方面に多いということは一つの特徴と思われる。

農業；富山県全体として、その性格を一口で言えば、「兼業型米作依存農業」となる。水田率・兼業率・機械化率等の高いのが特徴的である。特に、兼業に関しては、富山県の地理的条件との関連による交通網の発達と、近代工業の発達、更には富山市、高岡市、の都市機能 e t c、との結びつきが強く、従って離農せずして兼業出来ると言える。

この様に、富山市と高岡市は、互いに各々の特色を生かしつつも、一つの経済圏、文化圏、生活圏等を形成していこうとしているがそれはすなわち、富山市、高岡市を、あくまでも別個のものとして

してみなしていくよりも、そこに一つの方向づけがなされて初めて、両市の各々の機能が生かされる、もしくは生かされる部分が多いのではないかと推察される。

長野県御牧ヶ原・八重原台地の地理学的考察

— とくに両台地の比較と地域性について —

渡 辺 むつみ

本論文は長野県東部、上田 — 小諸間の千曲川南岸に位置する御牧ヶ原・八重原台地を調査地域